

中の君物語における竹取引用

井野葉子

はじめに

源氏物語研究の一端として、近年、源氏物語における竹取物語の影響論及び引用論が空前の盛況を呈していることは周知の如くである。昭和四十六年、奥津春雄氏は「八月十五夜」と「月の都」の語を主軸として須磨巻、御法・幻巻、手習巻に竹取の影響を見取った。四十九年、関根賢司氏は源氏物語を異郷論の視座から女が男を地上にとり残して他界へ飛翔する物語と把握した。手習巻の浮舟については、五十七年、今井源衛氏⁽³⁾がかぐや姫の投影を考察し、それを受けて六十一年、小林正明氏⁽⁴⁾がクリステヴァの記号論を用いて引用論による読みを展開した。ごく最近のものとしては六十三年の杉山康彦氏⁽⁵⁾の論考がある。一方、五十九年、紫の上の死の前後の竹取引用の問題を深く掘り下げたのは河添房江氏⁽⁶⁾であった。大君物語については六十二年に相次いで伊藤博氏⁽⁷⁾、久富木原玲氏⁽⁸⁾の論文が発表され、総角巻の薫の哀傷歌に竹取の影響を探らうとする。さらに同年、後藤祥子氏⁽⁹⁾が玉鬘十帖における竹

取物語取りを報告するなど、源氏研究における竹取熱が近時とみに高まって来ている。不遇な享受史を強いられ、源氏研究においても冷遇を受けて来た竹取物語が、ようやく日の目を見るようになったと言えるだろう。

そうした研究状況の中で、宇治十帖の中の君物語における竹取引用に関して本格的に取り上げた論文は未見である。そこで、中の君物語の一場面における竹取引用を中心として、源氏物語の内部に息づく竹取物語について考察してみたいというのが本稿のささやかな試みである。なお、随時、紫の上、大君、浮舟物語における竹取引用との比較をしながら論を進めていきたいと思う。

一

中の君物語における竹取引用については、実は池田和臣氏⁽¹⁰⁾「浮舟登場の方法をめぐって——源氏物語による源氏物語取——」によって既に指摘されている部分に属する。しかし、池田氏の論考の主眼は竹取引用の問題とは方向を異にし、宿木巻前半を解明

する一つの要素として竹取引用が触れられたに過ぎなかった。その論考は中の君物語の表現構造に肉薄する優れたものであり、それはそれとして高く評価されるべきものであるが、本稿の意図する竹取引用という観点からの問いかけはまだ掘り下げられる余地を充分残していると思われる。そこで、もう一度、その箇所を確認し、問題の所在を明らかにしていきたい。

宿木巻頭に語られた女二の宮の薫への降嫁の動きに刺激されて、匂宮と右大臣家の秘蔵娘六の君との縁談が八月と決定する。早蕨巻を通じて描かれて来た危惧的中した中の君は、父宮の遺誠に背いて宇治を離れた後悔と大君の生き方の深慮を痛感することとなる。加えて薫の、中の君に寄せる同情と我が物にしておけばよかったという悔恨が語られ、中の君と薫の心理的必然性をもって両者の接近をも孕みながら、物語はいよいよ匂宮と六の君の婚儀、八月十六夜へ突入する。

右大殿には、六条院の東の殿磨きしつらひて、限りなくよろづをととのへて待ちきこえたまふに、十六日の月やうやうさしあがるまで心もとなければ、……(三九〇頁。源氏物語の本文引用は小学館の日本古典文学全集による。以下、随時、頁数を付す。)

十六日の月の出は遅い。豪華を尽して婿を待ち受ける夕霧は月よりも遅い匂宮の訪れに痺れを切らして子息を二条院に遣わす。

大ぞらの月だにやどるわが宿に待つ宵過ぎて見えぬ君かな(三九〇頁)

一方、匂宮は愛妻中の君のもとを離れ難くて暫くは躊躇してい

る。

らうたげなるありさまを見棄てて出づべき心地もせず、いとほしければ、^①よろづに契り慰めて、もろとも月に月をながめておはするほどなりけり。(三九一頁)

しかし、そうもしてられない匂宮は、

「いま、いとく参り来ん。独り月な見たまひそ。心そらなればいと苦し」(三九一頁)

と言いつ残してやむなく六条院へ向かう。夫を送り出した中の君は匂宮の諫めにも拘らず、一人月を眺めて物思いに耽る。その心中は「幼きほどより、心細くあはれなる身どもにて」という回顧に始まり、父宮・姉君の死の悲嘆に暮れていた日々から二条院での匂宮との生活に至るまで、彼女の半生を辿るかのように語られるが、そうした思いは最終的には、その夜、つまり匂宮と六の君との結婚第一夜の彼女の懊悩に突き詰められていく。

「……今宵かく見棄てて出でたまふつらさ、来し方行く先みなかき乱り、^②心細くいみじきが、わが心ながら思ひやる方な心憂くもあるかな。おのづからながらへば」^③など、慰めんことを思ふに、さらに姨捨山の月澄みのぼりて、夜更くるままによるづ思ひ乱れたまふ。松風の吹き来る音も、荒ましかりし山おろしに思ひくらぶれば、いとのかかになつかしくめやすき御住まひなれど、今宵はさもおぼえず、椎の葉の音には劣りて思ほゆ。

山里の松のかげにもかくばかり身にしむ秋の風はなかり

来し方忘れにけるにやあらむ。(三九二〜三頁)

二

この夜、夫を権門の婿に取られる辛苦は、彼女の宇治恋慕の情を一層掻き立てている。こうした中の君の月下の物思いに不吉な予感を嗅ぎ取った老女房達は再び諫めの言葉をかける。

老人どもなど、「今は入らせたまひぬ。月見るは思みはべるものを。あさましく、はかなき御くだものをだに御覧じ入れねば、いかにならせたまはん。あな見苦しや。ゆゆしう思ひ出でらるることもはべるを、いとこそわりなく」……(三九三頁)

こうして八月十六夜のうちひしがれた中の君の苦悩の場面は幕を閉じる。

この場面における「月」がいかにか特殊効果を發揮しているかは容易に見てとれよう。「やうやうさしあがる」十六夜の月は、待ち侘びる右大臣家と気乗りのしない匂宮の心中を照らし出すのに充分効果的であるし、「澄みのほ」る月は、まんじりともせず一夜を明かす中の君側の時間の経過をも示している。しかし、何よりも重要なのは、月を見て思い乱れる中の君という設定である。傍線①⑤あたりは、古今集・巻第十七・雑歌上・詠人しらずの「わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」を踏まえた引歌表現であって、慰めようとしても慰めきれない彼女の苦悩を浮き彫りにする。さらに大切なポイントとなるのは、傍線②⑥のような人々の諫めにも拘らず、タブーを犯して月を見て物思いをする中の君という描かれ方であろう。月見るを忌むことについては一考の必要がありそうだ。

古注釈及び今日の注釈書は、月を見る禁忌に関して、後撰集及び小町集、竹取物語、白楽天の詩、古今集及び伊勢物語に見える業平の歌を指摘している。念のために以下に挙げておこう。(11)

○後撰和歌集・巻第十・恋二

月をあはれといふはいむなりといふ人のありければ

よみ人しらず

ひとりねのわびしきままにおきあつつ月をあはれといみぞかねつる

後撰集と同じ歌が小町集にとられていて、「中たえたるをとこの、しのびてきてかくれて見けるに、月のいとあはれなるを見て、ねんことこそいとくちをしけれとすのこながむれば、をとこいむなる物をといへば」という詞書が付してある。

○白氏文集・巻十四

贈内

漠漠蘭苔新雨地。

微微涼露欲秋天。

莫對二月明一思往事。

損君顔色減君年。

この漢詩は白楽天が妻に贈ったものである。

○古今和歌集・巻第十七・雑歌上

(題しらず)

なりひらの朝臣

おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなる

もの

右の歌は伊勢物語八十八段では「むかし、いと若きにはあらぬ、これかれ友だちども集りて、月を見て、その中にひとり」との散文が付されている。

以上の資料の範囲では、当時、月を見るを忌む俗信があったのだろうと推測するより他はない、といった所が現状であろう。今日の諸注釈書類もそのように処理している。

これらの資料を中の君の場面に引き寄せてみよう。若くはない男が老いを危惧するという業平の歌は、中の君には少しそぐわない気がする。が、一人、夫に取り残された中の君に後撰集及び小町集の歌を重ね合わせて読むことに異存はないし、また、自己の半生を思い起こした中の君に、月を見て往事を思うなと妻を諫めた白楽天の詩を背景として想起することも可能であろう。しかし、私はここで、竹取物語のかぐや姫が月を見て物思いをする一場面を重ねて読みたいのである。

……春のはじめより、かぐや姫、月のおもしろういでたるを見て、つねよりも、物思ひたるさまなり。在る人の、「月の顔見るは、忌むこと」と制しけれども、ともすれば、人間にも、月を見ては、いみじく泣きたまふ。……（中略）……かぐや姫にいふやう、「なでふ心地すれば、かく物を思ひたるさまにて月を見たまふぞ。うましき世に」といふ。かぐや姫、^⑧「見れば、世間心細くあはれにはべる。なでふ物をか嘆きはべるべき」といふ。かぐや姫の在る所にいたりて、見れば、なほ物思へる気色なり。これを見て、「あが仏、何事思ひた

まふぞ。思すらむこと、何事ぞ」といへば、「思ふこともなし。物なむ心細くおぼゆる」といへば、翁^⑨、「月な見たまひぞ。これを見たまへば、物思す気色はあるぞ」といへば、「いかで月を見てはあらむ」とて、なほ月いづれば、いでむつつ嘆き思へり。（九五〜六頁。竹取物語の本文引用は小学館の日本古典文学全集による。）

月見る女が二度に亘って制されていること。しかも、竹取の傍線⑦の「在る人」（お付きの女房）と宿木巻の傍線⑥の「老人ども」（老女房達）との諫めの言葉の類似していること。かぐや姫の心情が傍線⑧⑨のように「心細くあはれ」「物なむ心細く」の語に集約されているのに対し、意味合いは全く異なるにしても、果たして中の君も、己の境遇を傍線③「心細くあはれなる」身と感じ、その夜の辛さを傍線④「心細くいみじき」と痛感していること。さらに、かぐや姫が地上において故郷に思いを馳せ、地上の俗世界と天上の超俗的月世界の両者を相対的に捉える視点を持っているのに対し、中の君も都の地において故郷を思い、都と宇治の両世界を相対的に見比べる視点を有していること。これだけの共通点がありながら、宿木巻の中の君の一場面に竹取引用を読み取らない方が不自然ではないだろうか。

三

先述したように、中の君のこの場面に竹取引用を読み取る指摘をなした池田和臣氏は、「中君を追いつめる手際が冴えれば冴え

るほど、浮舟を登場させる役割とは別の、総角・早蕨巻に胚胎していた中君自身の問題が、その描かれ方の中から分沁されてしまふ」として、その「精彩きわまりない」「中君を追いつめる描写力」の一つとして、竹取引用表現に触れている。氏によれば、竹取引用によって、中の君の「宇治帰参のモチイフ」と「不吉な運命の予示」が「分沁され迫りあげられる」という。その通り、かぐや姫の昇天は、故郷の月へ帰るといふ意味で中の君の宇治帰郷を方向付け、一方、この世を離れるといふ意味で中の君の死を暗示すると思われる。私も池田氏の打ち出した二つの要素に対して賛意を表わしたい。が、池田氏の論文の趣旨は別の所にあつたからやむを得ないかもしれないが、氏の竹取引用に関する指摘はそこまでに留まっている。それを、あくまでも竹取引用の問題として扱つていこうとする時、私は、氏の指摘した二項目の他に新たな二つの要素をも加味して、合わせて四本の柱をたてて、竹取引用の生成する意味を追究してみたい。そして、竹取と相似形に重なることによつて逆にはみ出して来る竹取との差異、つまり源氏物語の独自性を読んでいきたい。

まず第一に、竹取引用によつて中の君の流離性が明確化することである。「宇治帰参」という言葉の中に曖昧に含み込まれることなく、中の君のおのが現状を表わすものとして、都への流離性を私はあえて一つの項目としてたてておきたい。かぐや姫にとっては月世界がその帰属すべき場所であり、姫にとって地上とは仮初の居場所ではなかつたが、中の君にとつても宇治こそが心身の拠り所であり、都は「おのが常世にてだにあらぬ旅寝」(早

蕨三四二頁)であること、つまり中の君の意識としては都の二条院での生活はあくまでも仮初めのもので、決して安住の地ではないことを押さえておく必要がある。そうした状況を竹取風に言つてみるならば、「おのが身は宇治の人にて、宇治に父姉の魂あり。」とでもなるのだからか。また、かぐや姫は月世界において罪を作つたがために昔の契りによつて地上にさすらつて翁に養われているが、その流離の根元は竹取物語では前世の宿縁に求められている。中の君の場合も、後の男子誕生によつて匂宮との結婚が宿世に因るものと考えられるので、その意味でも中の君はかぐや姫と相似形を作っている。しかし、まだ男子の生まれていないこの時点としては、また、この場面の心理描写における中の君の意識としては、こうなる宿世だったのだと思ひ至るといふよりは、軽々しく宇治を離れた後悔の念に苛まれていることが肝要であろう。周囲の状況に流されるままに夫に靡いて二条院に迎えられる、そこで憂き目を見るに至つた中の君は、宇治を離れた後悔が重くのしかかつてくる状況に置かれていたのである。

第二は流離性が必然的に促す帰郷志向である。これは池田氏が「宇治帰参のモチイフ」と名付けていたものに相当する。かぐや姫が月へ帰つた如く、中の君も宇治に帰るのではないか——こうした竹取引用の示す帰郷志向は、早蕨巻から繰り返し語られてきた上京の不安と帰郷の予感と連動して、物語の方向付けとして機能する。つまり、早蕨巻の上京の不安と帰郷の危惧を端的に表現した彼女の歌「ながむれば山よりいでて行く月も世にすみわびて山にこそ入れ」(三五四頁)や、宿木巻の匂宮の縁組が決まつた時

点での「つひには山住みに還るべきなめり」(三七三頁)という心中思惟、あるいは、八月十六夜の直前に語られた薫への宇治行きの打診など、帰郷志向を盛り上げる一連の文脈と竹取引用が呼応、連動しているのである。そして問題の核心は、彼女において宇治帰参がいかなる意味を持ち得るかである。かぐや姫の帰郷は、姫自身の意志とは無関係に初めから定められた約束事であったが、地上という俗世界から天上という清らかな、物思いのない聖なる世界への回帰を意味することに変わりはない。中の君の宇治帰郷も、匂宮との結婚生活、ひいては都の権門貴族を中心とした俗世間からの厭離、というよりは逃避、そして、八の宮・大君的な、俗世間と没交渉の聖立った生活に回帰しようとすることを意味する。しかし、ここで押さえておくべきことは、かぐや姫の昇天が地上の人間に対する絶対的優位性を保持しているのに対し、中の君の帰郷はひたすら彼女の結婚の不幸、人生そのものの敗北、いわば負け犬の意味合いを持たざるを得ない状況に追い込まれていることであらう。

第三に池田氏のいわゆる「不吉な運命の予示」である。源氏物語がかぐや姫の昇天を人間の死の象徴と見なし、ヒロインの死にかぐや姫を重ね合わせて美化する手法は、既に紫の上、大君の最期に使われていた。それについては河添氏、伊藤氏、久富木原氏に論究がある。そうした、竹取引用の物語前史を引き継いで、中の君の場面でも死の予告を読み取ることは充分可能である。後に中の君の生活の安定を保障する役割を果たす懷妊も、この時点においては不吉な要素として機能することは留意しておきたい。当

時の女性にとって出産は死と隣り合わせであり、正篇の葬の上の場合も数えてよいと思うが、誰よりも他ならぬ中の君の母北の方が出産後間もなく死んでいる。老女房達は中の君の食欲の無さに死期近き大君を思い起こしているし、中の君自身も懷妊による死を危ぶんでいる。また、「いさよふ月にゆくりなくあくがれんことを、女は思ひやすらひ、とかくのたまふほど、にはかに雲がくれて、」(夕顔二三三頁)と十六日未明の月に夕顔の死の暗示を漂わせた描写を想起することもできるかもしれない。これらの様々な不吉な表現と響き合せて、竹取引用による死の予告も引き出されて来ると思われる。

以上、第二、第三のポイントとして挙げたように、中の君における竹取引用は、都から宇治へという方向性と現世から冥界へという方向性との二重の意味合いを同時に孕んでいる。後者は、紫の上や大君の時に使われた、かぐや姫の昇天を人間の死の象徴として解釈する方法の延長線上にある。が、前者は、かぐや姫の昇天を死の象徴としてではなく、もとの居場所に帰るという意味にも解釈し直し、宇治と都の間のさ迷いという意味付けを打ち出したのである。この点は浮舟の先駆として興味深い。後の手習巻の浮舟における竹取引用は、紫の上や大君の時のような死の美化の意味を全く失い、帰郷志向として月の都ならぬ貴族社会の都へ復帰するの否かという問いを投げかける訳だが、そうした手習巻の竹取引用の有様は、中の君をめぐる竹取引用における帰郷志向の開拓を引き継いでいると思われる。いわば、中の君物語は竹取引用の視角からしても、大君物語と浮舟物語の間に位置する中間

項的な存在でもあると言えよう。

さらに第四のポイントとして私が主張しておきたいのは、中の君の結婚生活離反願望と竹取物語の結婚拒否の主題との関わりである。この場面は他ならぬ匂宮と六の君の結婚第一夜であり、彼女は「数ならぬ身」で結婚生活を営む惨めさを実感し、宇治恋慕の情を募らせている。権門貴族との縁組が成立して益々行動の自由の束縛されることになる匂宮の現状を考えると、中の君が宇治に帰ることは事実上、匂宮との結婚生活を放棄・離反することを意味するだろう。中の君の意識としては、八の宮の遺詔に背いて憂き目に会った自分は父の名を汚す世間の笑ひ者であり、薫の求婚を拒んで出家までしようとした大君の生き方こそが零落した宮家の娘のあるべき姿なのである。こうして大君の生き方を思慮深いものと正の方向に評価するに至った中の君は、大君的なるもの、即ち結婚拒否への傾斜——彼女の場合、既に匂宮の妻であるので結婚生活離反願望への傾斜——を形成しており、宇治帰参も結婚からの逃避と密接に絡み合っている訳である。匂宮の婚儀の第一夜に結婚拒否を主題とする竹取物語を引用したことは、中の君の結婚離反願望の昂揚と決して無関係ではないだろう。

伊藤博氏は「同じ結婚拒否（ないし不信）の主題軸につらなる紫の上物語→大君物語→浮舟物語が共通して竹取物語の濃い影の下にあることは、おそらくたんなる偶然ではあり得ず」として、若菜巻以降の結婚への不信の主題性と竹取物語の結婚拒否の主題との深い関係を論じている。私は伊藤氏のこの指摘に、八月十六夜の中の君をも新たに加えたい。女三の宮降嫁事件以降に愛執離

脱の境地に達した紫の上、結婚拒否を貫いて死んだ大君、愛欲を拒否する女性として手習巻に再生した浮舟に、それぞれ結婚拒否を主題とする竹取物語の引用表現が見られるが、一連の結婚生活離反願望の昂る中の君の一場面にも、こうして竹取の影は立ち顯われて結婚拒否の主調低音を奏でていたのである。紫の上→大君→中の君→浮舟と、女性達が結婚の不幸、男性不信の世界へ入り込んだ時に、竹取物語の影は手繰り寄せられていたのである。そして、それらの竹取引用群は姿を変えつつ一つの大きなうねりを形成して、若菜巻から端を發して宇治十帖へ滔々と流れ込む結婚不信の世界と主題的なレベルで関わっているのではないだろうか。

以上、中の君における竹取引用の意味について、都への流離性の明確化、宇治帰郷志向の促進、不吉な死の暗示、結婚生活離反願望という四つの角度から考察してみた。竹取引用のみを抽出して論じた訳だが、誤解のないように付け加えておくならば、竹取引用のみが意味の発光体として種々の方向性を發散する訳ではなく、文脈やその他の表現の中に竹取引用の断片を置いた時に初めて意味が発生し、竹取引用をも含めた様々な表現の総体が、流離性なり帰郷志向なり不吉さなり結婚離反願望なりを形成していることである。というより、竹取引用の意味を読もうとする読者の側が、物語の文脈に沿った意味付けを自然になしてしまふのかもしれない。

さて、その後の物語は、八月十六日の竹取引用で示された流離性、宇治帰郷志向、不吉な死の予告、結婚離反願望とどのように関わって突き進んでいくのか。結果的にはそうした予告は殆ど裏切られてしまったと言つてよい。中の君を極度の苦悩に追い詰められた物語はすんでの所で彼女の不幸を回避したからである。宇治への帰郷願望は皮肉なことにも薫への接近として専ら機能することとなる。宇治行き願ひは、父と姉の思い出を共有する、しかも後見としては欠かすことのできない薫への接近を促し、薫の内なる欲望を誘発した。宇治行きの実現が薫によつてしか果たすことのできない状況では、中の君の一縷の望みさえもが薫という男の欲情によつて阻まれてしまう。退路を断たれた彼女の進むべき道は諦念と忍従の教える処世術であつた。薫の接近も匂宮の嫉妬心を掻き立てる役目に終わり、薫の懸想を逸らすべく中の君から浮舟の紹介がなされた後、きわめつけの男子出産が中の君に安定をもたらしした。あまりにも唐突な浮舟の登場と、まるで肩透かしをくつたような中の君物語のあわただししい収束。八月十六夜の打ち出した方向性はお茶を濁されてしまったという感が強い。構想論が噴出するのも無理はない。宇治十帖は、作者の筆の赴くままに物語が脹らんんだり縮まつたりするらしい。

さて、竹取引用の問題に話を戻そう。私がたてた四本の柱のうち、帰郷志向と死の運命の予告と結婚生活離反の方向性はその後物語で回避されてしまったことは明らかである。しかし、ただ一つ、流離性だけは物語に深く根を下ろしたと言えそうである。つまり、中の君の場合、都の俗世界に流離し続けなければならぬ

い所に中の君物語の竹取引用の特殊性があるのではないだろうか。このことは、紫の上や大君における竹取引用と比較することによつて一層明確に浮かび上がってくると思われる。

紫の上、大君、中の君、浮舟における竹取引用を概括的に見なししてしまわないでそれぞれの方法の違いに気を配ると、中の君における竹取引用の有様も見えて来そうである。なぜなら、同じ竹取引用と言っても、源氏物語の文脈によつて、また、竹取物語の中での引用された箇所の違いによつて意味合いが変わつてくると思われるからである。私見の赴く所、紫の上の場合はその死がかぐや姫の昇天と重ねられ、正篇の堂々たるヒロインの死を美化・聖化・理想化し、最愛の女性喪失感にうちひしがれる光源氏の悲嘆を竹取の翁や帝の心感いと重層的に表現するという方法であつた。大君の場合も、紫の上と同じくその死を昇天に重ねて聖化し、残された薫の追慕とともに冥界へ送り出した。また、大君物語全体が女の結婚拒否譚、男の求婚譚として竹取物語の型語を踏んでいる。それに比べて中の君の場合は紫の上や大君とは違い、厳密に言えば、かぐや姫の昇天、と言うよりは、昇天一步手前の地上におけるさすらいのかぐや姫の一場面が重ねられていることに注意しておきたい。地上において月を眺めるかぐや姫という設定を引いた所が肝要なのである。かぐや姫はこの場面では、地上に身を置きながら月世界と地上世界との間に板挟みとなる中間的存在である。こうした状況におけるかぐや姫を引いた中の君は、都に身を置きつつも心は宇治に浮遊し、都と宇治に身と心を引き裂かれ、その両者の間に揺れて止まない中途半端で不安定な存在とし

て位置付けられるのである。かぐや姫が地上から遙か遠く月を眺めたように、中の君は宇治・八の宮・大君のなるものを遠く都の地から憧憬するより他にない。変化の人かぐや姫が人間の感情に理解を示すほど俗界に接近する一方、依然として異郷志向を持統して、天上と地上との二重性を有していたように、その後の中の君も、一応の安定を迎えて匂宮の妻の座におさまろうとする一方で、やはりすれすれの所で都の人にはなりきれずに宇治憧憬の心を引き摺ることになる。そうした宇治憧憬の心を抱え込んだまま、彼女は、妻として母として常識的処世術に身を固めて都の俗世間に埋没しなければならなかった。紫の上のように甘い感傷とともに冥界へ送られることなく、大君のように死をもって自らの生を完結して聖化されることなく、現実の貴族社会の矛盾の渦中に身を投ずるより他に逃れるすべのない中の君は、昇天できずに世俗にさすらうかぐや姫、という新しい問題をその肩に担ったのである。こうして昇天できないかぐや姫の問題が中の君を突き抜ける形で新たに見据えられたことは、後の手習巻の浮舟における竹取引用を考える上で非常に興味深いものを含んでいると思われる。

手習巻では「かぐや姫を見つたりけん竹取の翁よりもめづらしき心地」(二八八頁)と妹尼君の心中思惟として明示され、浮舟自身も「われかくてうき世の中にめぐるとも誰かは知らむ月のみやこに」(二九二頁)と竹取を強く意識した歌を詠んでいた。そうした竹取引用は、小野への流離、都への復帰の問題を投げかけ、さらに、竹取の翁ならぬ妹尼君、五人の貴公子ならぬ中将が配置され、それらとの葛藤の中から浮舟の愛欲拒否の姿勢が迫り

上げられる構造になっている。しかし、竹取のプロットとの緊密な対応は逆に竹取との相違点を浮き彫りにした。長谷川政春氏が「かぐや姫のように月の世界へ昇天することもできずにさすらう浮舟」と表現したように、浮舟は帰るべき月の都もないし、出家して尼衣を纏っても物思いは消えない。このような、昇天できないかぐや姫を描くという竹取引用の有様、竹取を引用しつつ竹取を否定していく方法は、実は中の君物語において試みられていたのである。

結 び

大君物語のように結婚拒否譚としての話型的踏襲というのではなく、浮舟物語のように明示された引用という訳でもなく、中の君物語の場合はごく限られた一場面の投影に過ぎない。それはともすれば見過ごしてしまいがちな程、源氏物語の中に埋もれているかもしれない。しかし、こうして目を凝らして掘り起こしてみると、宇治十帖と竹取との接近が手習巻に一拳に噴き出す一歩手前で潜在的に胚胎し、昇天できた大君から昇天できない浮舟へと竹取引用の方法が次第に変化していく、そうした道程に、中の君物語における竹取引用は位置しているのではないだろうか。

注(1) 奥津春雄氏「月の都——紫式部の『竹取物語』」撰取の方

法——」(『国文学研究』第四三集、昭46・1)

(2) 関根賢司氏「かぐや姫とその裔」(『日本文学』昭49・6、『物語文学論——源氏物語前後——』所収)

- (3) 今井源衛氏「浮舟の造型——夕顔・かぐや姫の面影をめぐって——」〔『文学』昭57・7〕
- (4) 小林正明氏「最後の浮舟——手習巻のテクスト相互連関性——」〔『物語研究——特集・語りそして引用』物語研究会編、新時代社、昭61〕
- (5) 杉山康彦氏「かぐや姫と浮舟——物語の他者・他者の物語——」〔『文学』昭63・10〕
- (6) 河添房江氏「源氏物語の内なる竹取物語——御法・幻を起点として——」〔『国語と国文学』昭59・7〕
- (7) 伊藤博氏「死なぬ葉・死ぬる葉——竹取と源氏——」〔『国語と国文学』昭62・3〕
- (8) 久富木原玲氏「天界を恋うる姫君たち——大君、浮舟物語と竹取物語——」〔『国語と国文学』昭62・10〕
- (9) 後藤祥子氏は「共同討議・玉鬘十帖を読む」〔『国文学』昭62・11〕の中で、玉鬘十帖における「竹取」取りを報告。

- (10) 池田和臣氏「浮舟登場の方法をめぐって——源氏物語による源氏物語取——」〔『国語と国文学』昭52・11〕
- (11) 後撰集、小町集、古今集の引用は新編国歌大観による。白楽天の詩については『白楽天全詩集』第二巻（佐久節氏註解、日本図書、昭53）による。伊勢物語の引用は石田穰二氏訳注の角川文庫本による。
- (12) 当時の人々には、夫婦の間に子ができるのはそうなるべき前世からの因縁があったのだという考え方が浸透していたと思われる。こうした夫婦観については、上坂信男氏の『源氏物語の思惟・序説——古代物語の研究（統）——』〔笠間書院、昭57〕に収められている。「前の世の契深く——宿縁について（一）」〔仮初めの契り——宿縁について（一）』を参照されたい。
- (13) 長谷川政春氏「浮舟」〔『源氏物語必携Ⅱ』所収、学燈社、昭57・2〕

新刊紹介

今井卓爾著
『枕草子の研究』

今井卓爾博士の精力的なお仕事には驚嘆の他はない。労作『譯注と評論』全六巻が上梓されて間もないというのに、はやくも『枕草子』の本格的総合的研究書を公にされた。

本書は『枕草子』という作品を作者とと

もに、多面的複合的な視点から解明考究している。次に掲げる本書の章立ては、博士の目配りの広さ、確かさを何よりも雄弁に物語っていよう。

- 一「枕草子」と清少納言／二清少納言の宮仕環境／三想念の形象化／四いわゆる章段／五和漢文学への対応／六題材の世界／七語句使用の方向／八叙述の手法／九対人批評の諸相／一〇吹語の姿勢／一一美の感受／一二著作意図と達成／一三

「春はあけぼの」考／一四「この草子」考／一五清少納言と紫式部

今井博士の博搜にして堅実な論法は、作品そのものがあるがままに読むことから出発し、丹念に組み立てられていく。この一見容易そうで、きわめて困難な作業に博士は鮮やかな手腕を示し、その集積はあおぎみるばかりの偉容である。

（平1・3 早稲田大学出版部 A5判 三三四頁 七〇〇円） 〔福家俊幸〕